

# ピアノ読譜力向上のためのフレーズカード活用を通して

## —子どもの意識変容が演奏表現に与える影響—

星槎大学大学院客員研究員 泉田 雅子

### 要旨

本研究は、ピアノレッスンにおいて、フレーズや旋律同士の関係性、音楽構造への気づきが、演奏表現にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし、子どもの音楽的レベルに応じたフレーズカードを作製し、自ら考えカードを手元で並べ替えるなどの工夫ができる指導を提案したものである。

研究の背景は、筆者が主宰するピアノ教室において、読譜に対して苦手意識がある子どもが見られるため、先行研究から、読譜力向上においてフレーズを認識する必要性についての知見を得、研究方法として、個々に応じたフレーズカードを作製・活用したレッスンを行った。レッスンでは、逐語記録と子どもの演奏評価票から、フレーズカードの効果を検証した。検証レッスン後、対象児に半構造化インタビューを実施した。分析方法は、インタビュー内容を SCAT<sup>(1)</sup>で分析・理論記述を行った。その結果、フレーズカードを活用したレッスンは、楽曲の構造を検討する契機となった。また、演奏表現に重要な影響を与えることが示唆され、結論として読譜指導法に効果的であることが明らかにされた。

キーワード：ピアノレッスン／読譜／フレーズ／楽曲の構造／SCAT

### 1. 研究の背景と目的

筆者は、主宰する音楽教室において5歳の子どもからおとなまでピアノ指導を行っている。子どものお大半は小学生だが、幼児教育系の大学、短大、専門学校に進学予定の高校生や保育士もいる。

一人一人のピアノ指導では、読譜力が不足しているために、譜を読み、理解して演奏することに苦手意識をもつ学習者が見受けられる。譜読みは、ワークブックや市販の音符カードを用い、リズムに関してはリトミック<sup>(2)</sup>教具を活用して、読譜力向上を図ってきた。その後、一つ一つの音符を読めるようになり、書くことができ、弾けるようになったものの、円滑な演奏に結びつかない子どもが見られる。これは、いくつかの旋律を音楽的なま

とまり(フレーズ)として捉えていない、フレーズの反復と変化などが知的に理解されていないなどに起因するものではないかと考えた。音符のまとまりをフレーズとして捉え、読譜力向上を図りながら、一人一人が自己の感情を表現できるようになる手立てが必要ではないか、そのためには、どのような指導法が効果的かという問いを持つに至った。

木村(2016)は、音楽科の学習指導に関わって、児童生徒の読譜力の低下を指摘しており、その解決のためには「小学生の時期に読譜に関する知識や技能を一定程度まで身に付けさせることが必要である」と述べている。森下(2009)は、教職12年経験者研修で、音符カードを組み合わせてリズム制作を行う授業を参観した。児童らは熱心に学習し、自分の作品に愛着を感じていた。この事実から、楽譜は必要性があって初めて覚えられると同時に、構造学習では楽譜が有効な道具である点がわかったとし、音楽構造を学習することが、音楽学習の基本になるのではないかと示唆している。また、水戸(2009)は、「熟達した演奏者は、さまざまな音楽的知識を活用して、いくつかの音符を音楽的なまとまりとしてつかんでいるのである」と述べている。このほか、福田ほか(2019)は、譜読みが速くなるためには音型をかたまりとして見る訓練をすることがポイントとなると述べ、木村(2016)は、楽譜に触れる活動について、児童が自分の手元で操作できるカードが有効的であると論じている。ピアノ学習における読譜でも、音楽の構造<sup>(3)</sup>、構成要素<sup>(4)</sup>、構成原理<sup>(5)</sup>を学習することは、他の楽器を含め、音楽全般の学習に通ずるものと考えられる。

以上のことから、本研究では、音楽のまとまりとしてのフレーズに着目し、一人一人が演奏する楽曲に対応したフレーズカードを作製し、ピアノレッスンに活用する。レッスンで活用したことによる子どもの意識の変容が、ピアノ演奏表現にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とし、読譜と演奏表現の両面からその変化と有効性を検討する。

## 2. 先行研究及び文献の検討

### 2. 1 読譜とは

水戸(2009)は、読譜において難しいのは、楽譜に書かれた数多くの音を、反射的に認識しなくてはならないことであると述べている。音符を反射的に読むことについて、岩口(2008)は、「ずばり読み」と定義している。「ずばり読み」は、その音そのものを瞬時に読むことで、一方、何かの音を基準にしてそこから数えて読むことを「数え読み」と言っている。「数え読み」では演奏が滞ってしまうのは否めない。

田中(2019)は、「読譜行為は、音楽を奏でるものにとっては音楽表現に必要な音楽構造の解析や楽譜の再構成に必要なものであり、そのような力を持つか否かで豊かな音楽表現ができる、すなわち演奏技能の熟達に繋がるのだろう」と予測している。また、作曲家の鶴崎(2019)は、音楽の約束事や構成要素、表現のための形式等への理解を通して、作者の意図に基づいた知恵と工夫を楽曲から読み取ることが読譜であり、知的な作業であると提唱する。この知的な作業に基づく読譜力こそが、技術力と相まって裏付けのある個性

的な演奏へと導いてくれるだろうと述べている。

これらのことから、読譜とは、音高、音価を理解し、その音に相当するピアノの鍵盤が押さえられるのみならず、作者の意図を読み取ることであると理解できる。ピアノ演奏においては、音高、音価を反射的に理解して、瞬時に相当する音を弾くのは基本的な事柄であることは自明である。

## 2. 2 読譜指導の実態

### 2. 2. 1 小学校における読譜指導

次に、読譜指導は、学校教育ではどのように成されているかを概観する。

木村（2016）は、2014年にH市内の全小学校17校の2、4、6年生の児童に調査用紙を配布し、読譜力の実態調査を行った。6年生では、教科書に掲載されている曲のフレーズの階名を読む問題は、正答率60%強、へ音記号の音符を答える問題の正答率は20～30%だった。その後、木村は、勤務校の3年生、5年生を対象に毎授業で3～5分の継続的な読譜指導を行った。その結果3年生でも以前より短時間で階名を読む学習が進むようになった、と述べている。

嘉村（2021）は、公立小学校において1年間、全学年の音楽を担当した。その中で、歌や演奏は得意としている児童が多い一方で、楽譜を読めない児童が多数いることに気がついた。そのため、楽譜を見て演奏する能力向上を目的として、3年生の高音部譜表によるハ長調の階名の知覚・感受に焦点を当て、取り組みを行った。その結果「読譜を継続的に行うことで、楽譜を読む能力は向上させることができるとわかった」と結論付けている。

様々な行事がある中で、工夫を凝らして、児童の読譜力向上に取り組む小学校教員の姿を認識した。読譜力向上への課題は、6年間通していかに系統的な指導を実施していくかが急務であるが、読譜に対する指導の必要を感じながら、十分な指導が行われていないことも課題として残されたままである。

### 2. 2. 2 幼児教育関連校の読譜指導

では、幼児教育関連校の読譜指導は、どのように行われているかについて述べていく。

保育士や小学校教員を目指す学生には、ピアノ演奏技能の習得は欠かせない。大学入学と同時にピアノ習得を開始する学生も多い。河合ほか（2017）が勤務する大学では、履修学生全員に読譜力の育成を喚起するとともに、特に読譜が苦手な学生に対して、新たに個別指導を取り入れた。この指導を用いた研究で、学生の読譜力が常に伸びていくとは限らないことを証明する結果がいくつかあったとし、読譜力向上とピアノ技術向上は密接な関係にあると見解を示している。

現代の子どもたちは、好きな歌手の歌を動画などで見て、その音源を聴いて覚えている。中島（2022）は、幼稚園、保育園、小学校の音楽の授業もCDや動画を頼りに、耳で覚えさせ歌を歌わせる教員が多くなってきているように感じていると述べる。そのため、そのように育った子どもたちが、保育士や小学校教員を目指し大学に入学したものの、必須科目で

あるピアノの授業において、多くのピアノ未経験の学生が大変な苦勞をしている姿に直面するという。そこで中島は、勤務する大学で、独自の「解説楽譜プリント」の配布及び説明を行った。この解説プリントを活用したことで、苦手意識を克服でき、満足感や達成感を得られた学生も多いと述べている。

大学に入学してからピアノ学習を開始する学生に対する、読譜に関する指導者の取り組みは、その労力が察せられる。この場合、2年～4年の短期間で、現場ですぐピアノが弾けるようにするためには、まず基本的に瞬時に音名が判別できるトレーニングが必須であるが、指導者が読譜に重きを置いた指導は先行研究でも数少ない。

## 2. 2. 3 ピアノ個人レッスンの課題と道筋

唐津(2022)は、川村(1999)が1998年～1999年に教員養成系大学の学生を対象に実施した調査と、2021年に自身が実施した調査とを可能な範囲で比較し、23年間でピアノ学習において、どのような変化がみられたのかを分析、検討した。1998年では、「教師の問題」「練習の問題」「教材の問題」の3点が学校生活の忙しさと重なり、ピアノ学習の継続を困難にしているという結果であった。2021年では、「教師の問題」と「教材の問題」はほとんど見られなくなり、「練習の問題」が浮き彫りになった。唐津は、これは習い事の多様化、塾通いの低年齢化、中学受験率の高さなど様々な要因が絡み、子どもが多忙になったためであると述べている。唐津は、子ども一人一人に合ったオリジナルカリキュラムを検討し、実践していくことが不可欠だという考えを示している。一人でも多くの子どもが、成長した後も心豊かに過ごせるよう、生涯音楽学習を見据えたレッスンを心がける重要性が示唆される、と結んでいる。

## 3. 研究方法と内容

### 3. 1 対象者

子どもの中には楽譜を読まずに、耳だけに頼って聞き覚えや丸暗記で弾いてしまうケースも見られる。ピアノは他の楽器と比較して音が多く、徐々に曲も長くなる。そのため、聞き覚えや丸暗記だけではいずれ演奏が困難になると推測される。子ども一人一人が自分の力で譜を読み、将来的にも演奏を楽しめるよう、前述の先行研究、文献より知見を得て、読譜力向上のためのフレーズカード作製と活用を試みることにした。

対象者は、筆者の音楽教室に通う子ども4名である。これまでのレッスンでは年齢に関わらず演奏能力に応じて、指導を展開してきた。学習指導要領に応じた学校の音楽科教育とは異なり、筆者の音楽教室では、ピアノ学習の導入期は音符とリズムに関する学習を重視している。その後、一般財団法人音楽振興会が実施している音楽能力検定試験に準拠した教本楽曲をレッスンしながら、テクニクの教本、読譜及び楽典のためのワークブックを加えていく。この過程で読譜力育成が十分ではなく、読譜力向上に伴って演奏能力向上も期待される子ども及び保護者に研究協力を依頼した。また、インタビューを予定してい

るため、自分の気持ちや考えをことばにすることが可能である点も考慮した。

インフォームドコンセント（アセント）については、対象児の保護者に筆者が、文書を提示しながら研究についての詳細を説明した。対象児本人に対しては同意が得られた保護者からの説明に加えてレッスン時に筆者からも説明し、同意を得てから検証レッスンを開始した。なお、この研究は、星槎大学研究倫理審査承認を得ている。

### 3. 2 検証レッスン

一人一人のグレード（級）に合った教本内のレッスン予定の曲を小畑（2011）の異なった旋律素材の中に類似点を見つけていくことによって、旋律素材同士の関係性を発見するという視点に着目して楽曲分析を行った。その曲の中でフレーズの反復、変化がわかりやすく、個々の苦手要素（リズム、音価等）が多く含まれていることを考慮して選曲し、概ね4小節のフレーズをカードに付した。市販の音楽ノート2段のサイズを参考に縦6cm横25.5cmの個々に合わせたフレーズカードを作製した。

選曲した楽曲を以下に示す。

- ・A児 さんぞくのうた（p.43）、おかあさんのおへんじ（p.51）、かっこう（p.53）『NEW ピアノスタディレパートリー1』（2011）財団法人ヤマハ音楽振興会
- ・B児 かっこうどり（p.16）、小さなピアノ（p.23）、メヌエット（p.37）『NEW ピアノスタディレパートリー3』（2009）財団法人ヤマハ音楽振興会
- ・C児 古きロシアの歌（p.12）、ほらあの山に（p.18）、子どものうた（p.22）『NEW ピアノスタディレパートリー4』（2013）一般財団法人ヤマハ音楽振興会
- ・D児 プレリユード（p.30）、ガボット（p.32）、かわいいワルツ（p.36）『NEW ピアノスタディレパートリー4』（2013）一般財団法人ヤマハ音楽振興会

#### <検証レッスンの流れ>

レッスン時、ピアノの譜面台に概ね4小節のフレーズカードを置き、一つ一つの音ではなく、フレーズとして捉えながら演奏する。対象児の理解に合わせて、最初は2小節やそれより短い単位で実施する。

- (1) 瞬時にフレーズとして捉えられるように、フレーズカードをランダムに提示して弾く。
- (2) 対象児が複数枚のフレーズカードを自由に並べ替えて弾く。
- (3) 旋律及びリズムの類似点や相違点を見つけ、どのように弾くか考える。
- (4) 再びフレーズカードを並べ替えて、自分が思い描く曲に組み立てて、自らが考えた弾き方に沿って演奏する。
- (5) 楽譜を見て弾き、曲の山を捉えて、思いや意図を持って演奏する。

レッスンの1曲目は、フレーズカードを活用し、2曲目はフレーズカードを使用せず、3曲目は再びフレーズカードを活用した。1曲につき3回のレッスンを行った。概ね1週間に1回、1回のレッスン時間は、20～30分間で行った。検証レッスンは、録音を行っ

てデータを収集し、逐語記録を作成した。毎レッスンの開始時、レッスン中、終了時の演奏で、筆者が個々に合わせて考えた演奏目標の到達度による演奏評価票を作成した。2024年3月～4月の期間で実施した。

### 3. 3 インタビュー調査

検証レッスンをすべて終えた後、フレーズカードを用いたレッスンについて半構造化インタビューを行った。インタビューは録音し、インタビューデータは SCAT を用いて分析、理論記述を行った。検証レッスンによる逐語記録及び演奏評価票とインタビューデータの分析結果から、読譜力向上のためのフレーズカードの活用が、子どもの演奏表現にどのような影響を与えたのかを総合的に考察した。

## 4. 分析結果と考察

### 4. 1 分析結果

一人につき3曲を演奏し、1曲につき3回のレッスンを実施したものそれぞれについて、逐語記録及び評価規準表に基づいた演奏評価票を作成した。その中から一例としてA児の「さんぞくのうた」のレッスンに使用したフレーズカードの内容を図1に示す。



図1 A児「さんぞくのうた」のレッスンに使用したフレーズカードの内容  
「さんぞくのうた」ポーランドの曲 おうちやすゆき作詞 筆者補作

次に、A児「さんぞくのうた」3回目レッスンの逐語記録を表1に示す。

表1 A児「さんぞくのうた」3回目レッスンの逐語記録

1	筆者	はい、復習。待って、待ってへ音記号。
2	A児	(弾く。1回目)
3	筆者	同じメロディどれでしょう。
4	A児	これとこれ。
5	筆者	この中で何か気がつかない。
6	A児	えーと、スラーがある。
7	筆者	そう。それと。
8	A児	4分の4拍子。
9	筆者	そう。それと。
10	A児	えっと。あれ、いっしょだけど。
11	筆者	そうよ。いっしょなのよ。繰り返しています。わかった。
12	A児	わかった。
13	筆者	これで今度楽譜を見て弾きます。同じものをどうやって弾くか考えながら弾けるかな。どことどこが同じ。
14	A児	えーと、1番目と3番目。
15	筆者	そうだよ。それをどうやって弾く。同じだけど。強弱でもいいよ。
16	A児	えっと、音の違いにする。音が大きいのと小さいのにする。
17	筆者	この前のレッスンで大・中・小にするって言ってたね。理由何だっけ。
18	A児	最初は元気だから。それで疲れたから。
19	筆者	じゃあそれでいきますね。これはどうする。こことここ同じだけど。
20	A児	こっちがちょっと大きめ。
21	筆者	なんでそっちが大きめ。
22	A児	スポーツドリンク飲んで元気になったから。一番目が元気で、だんだん疲れてきた。でもスポーツドリンクを飲んでちょっと元気になって、でもまた歩くと疲れたーでおしまい。
23	筆者	おもしろい。じゃそれで弾いてください。
24	A児	(弾く。2回目)
25	筆者	へ音記号だからもっと低い、低い。
26	A児	(弾く。3回目)
27	筆者	最後仕上げ。楽譜見ながらやってね。
28	A児	(弾く。4回目)

毎レッスンの開始時、レッスン中、終了時の子どもの演奏で、個々の目標到達度による演奏評価票を作成した。A児「さんぞくのうた」レッスンの評価票を表2、表3、表4に示す。

表 2 1 回目旋律右手

観点	音名	音価	ダイナミクス	フレーズ	旋律の類似点
開始時	C	B		C	
レッスン中	C	A		A	
終了時	A	A		A	

表 3 2 回目旋律左手

観点	音名	音価	ダイナミクス	フレーズ	旋律の類似点
開始時	C	A	C	A	
レッスン中	C	A	B	A	B
終了時	B	A	B	A	A

表 4 3 回目両手

観点	音名	音価	ダイナミクス	フレーズ	旋律の類似点
開始時	C	A	C	A	B
レッスン中	C	A	B	A	B
終了時	B	A	A	A	A

(表 2、3、4 筆者作成 評価日令和 6 (2024) 年 3 月～4 月)

表 5 に筆者が A 児に身につけてほしい目標を示す。

読譜力向上のためのフレーズカードの活用により、子どもの意識変容が、演奏表現にどのように反映されたかを探るため、検証レッスン後、インタビュー調査を行った。

分析は、SCAT を用いた。SCAT 開発者である大谷 (2020) は、SCAT の理論とは、「普遍的、かつ一般的に適用する原理のようなものではなく、このテキストの分析によって言えることである」と述べ、加えて、「質的研究そのものが、一般性や普遍性より、個別性や具体性の深い追求にもとづいて、また多様性を前提として行う研究であるためそれは質的研究としてはかえって意味のあることである」と述べている。また、SCAT による分析は、大谷尚 (2020) 『質的研究の考え方 研究方法から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会を参考にした。

C 児のインタビューから SCAT を用いて分析した「理論記述」「さらに追究すべき点・課題」を表 6 に、4 段階のコーディング (抜粋) を表 7 に示す。〔 〕はコードである。

表 5 筆者が A 児に身につけてほしい目標

観点		A 児の規準	A	B	C
知識・技能	音名	中央ド～ソまでの音名を読むことができる。	中央ド～ソまでの音名を読むことが十分できる。	中央ド～ソまでの音名を読むことが概ねできる。	中央ド～ソまでの音名を読むことが部分的にできる。
	音価	4分音符・2分音符・全音符を理解する。	4分音符・2分音符・全音符を理解して十分演奏できる。	4分音符・2分音符・全音符を理解して概ね演奏できる。	4分音符・2分音符・全音符を理解して部分的に演奏できる。
		4分休符・全休符を理解する。	4分休符・全休符を理解して十分演奏できる。	4分休符・全休符を理解して概ね演奏できる。	4分休符・全休符を理解して部分的に演奏できる。
	ダイナミクス(6)	強弱に気を配る。	強弱に気を配って十分演奏できる。	強弱に気を配って概ね演奏できる。	強弱に気を配って部分的に演奏できる。
思考	フレーズ	いくつかの音符をフレーズとして捉える。	いくつかの音符をフレーズとして捉え十分演奏できる。	いくつかの音符をフレーズとして捉え概ね演奏できる。	いくつかの音符をフレーズとして捉え部分的に演奏できる。
	旋律の類似点	旋律の類似点を見つける。	旋律の類似点を見つけることが十分できる。	旋律の類似点を見つけることが概ねできる。	旋律の類似点を見つけることが部分的にできる。

(筆者作成)

表 6 C 児のインタビューから SCAT による分析 理論記述、追究すべき点・課題

理論記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・〔拡大と部分による認識の容易さ〕、〔一つの事柄に対する認識の容易さ〕を感じており、〔拡大と細分化による要素の浮き彫り〕を認識している。</li> <li>・〔フレーズカードによる反復を見つける認識への効果〕、〔全体を見る活用法への課題〕はあるが、フレーズカード活用を〔継続した結果上達する自分への期待と希望〕があり、〔明白な視野により認識に効果〕があることを感じている。</li> <li>・〔全体を演奏する時のフレーズの応用〕には課題が残り、〔以前行っていた読譜方法〕は有用ではなく、〔反射的に認識する読譜能力〕が必要である。</li> <li>・〔読譜力向上による演奏上達と喜び〕を目指して、〔自分に適した曲を繰り返し弾く事による価値と重要性〕を認識している。</li> <li>・〔忘却と想起〕の関係性から〔レッスンした日〕に行う〔復習の重要性〕に気づいている。</li> <li>・〔ピアノ演奏に対する意欲〕があり、〔フレーズカードへの期待感〕がある。</li> <li>・〔細分化により二つの事を同時進行する事が可能〕になり、〔分化による細部への気づきと疑問〕が生じる。</li> <li>・〔フレーズカードをスキルの獲得に活用〕することによって〔読譜への明るい見通し〕を立てる事ができ、フレーズカードを活用したレッスンは〔得るところの多い時間〕であると考えている。</li> </ul>
------	---

さらに追究すべき点・課題	・楽曲全体の構造把握のための効果的な方法/ ・楽曲全体を演奏する時のフレーズの扱い方/ ・以前行っていた数え読み/ ・反射的に認識する読譜/ ・音楽記号の習得
--------------	---

表7 C児のインタビューからSCATによる分析(抜粋)

話者	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の概念	(4) テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
筆者	フレーズカードを活用してから演奏した時に今までと違う何か変化を感じましたか。				
C児	いきなり楽譜を見てやるよりもやりやすい。続けていけばうまくなるかも。	やりやすい/続けられようくなるかも	認識しやすい/継続/上達に対する期待	継続した結果への見通し	継続した結果上達する自分への期待と希望
筆者	具体的にフレーズカードの何が良かったですか。				
C児	見やすい。わかりやすい。	見やすい/わかりやすい	視界良好/はっきり	視野が明白	明白な視野により認識に効果
筆者	具体的にフレーズカードの何が使いにくかったですか。				
C児	フレーズ自体は覚えられけど全体を弾く時にフレーズのつなぎ目で止まってしまう。	全体/止まる	すべて/停滞する	全体を演奏することへの適用	全体を演奏する時のフレーズの応用
筆者	読譜についてどのようなイメージがありますか。				
C児	今はやらないけど前はわかる音符を規準にして数えた。	数え読み	規準から数える読み方	読譜	以前行っていた読譜方法
筆者	普段、読譜で困っていることがあったら教えてください。				
C児	音符がパッとわからない時がある。	パッと/わからない時	瞬時/判然としない時	瞬時に認識不可	反射的に認識する読譜能力
筆者	音符をスラスラと読めるようになりたいと思いますか。また、その理由を教えてください。				
C児	はい。曲を早く覚えられて上達が早くなり、いろいろな曲を弾くことができる。そうなると楽しいし、面白い。曲をただ弾くだけで楽しい。弾ける曲があるのいい。	上達が早い/いろいろな曲を弾く/楽しい/面白い/弾ける曲	進歩/たくさんの曲/演奏できる曲/気分が良い/愉快	能力向上によって演奏できる曲が増えるとともに伴う楽しみ	読譜力向上による演奏上達と喜び

## 4. 2 総合考察

本検証レッスンの結果、子どもたちは、フレーズを捉えられるようになり、演奏に強弱や抑揚が表れ、楽曲の山場や表現について考えるようになった。

子ども4名の検証レッスンの考察から、以下4点の共通事項を抽出した。

- 1、フレーズを意識し認識する。
- 2、フレーズカードを並べ替え、自ら工夫し組み立て演奏する活動に意欲的に取り組む。
- 3、旋律の反復と変化を発見し、演奏表情付けでは、音楽の構成要素「強弱」を考え、積極的に意見を述べる。
- 4、楽曲の山場を見つけ、表現方法を工夫している。

フレーズカードは、概ね4小節のフレーズから成り、最初は、一音、一音弾いていた子どもも、徐々にフレーズを意識してまとまりとして演奏するようになった。フレーズカードを自由に工夫し並べ替え、組み立てて演奏する活動では、自発的に、音の密集具合やアーティキュレーション<sup>(7)</sup>を考え、取り組んでいた。旋律の反復と変化を発見し、演奏表情付けでは、「強弱」を考え、自分なりの楽曲に対する思いやストーリーに沿って、思案し、演奏していた。既習曲から発想を得るなどして、曲の山場を考え、表現方法を工夫している。実際の表現では、演奏技術面の問題も見られたが、子ども自身が思い描く表現方法を考えることができた。検証レッスン一人3曲のうち、2曲目のレッスンは、フレーズカードを用いずに行った。演奏評価票からは、片手奏だが、フレーズカードを活用した場合、活用しない場合よりも、概ねワンレッスン程早く円滑に演奏できるという結果であった。

インタビューデータの分析からは、フレーズカードを活用してから、楽譜を用いた演奏をすると円滑に進めることができ、フレーズカードを用いて行ったことが、記憶に残っていてスムーズに演奏できるのだと判明した。フレーズカードへの肯定感があり、読譜の必要性を理解し、読譜力が向上するのではないかと、という自分への期待を抱いていることが明らかになった。ピアノ演奏や読譜に憧れがあり、ピアノ演奏がもたらす心地よさを感じている。

これらのことから、フレーズカードを活用したレッスンは、子どもが、各フレーズの旋律やリズムの類似点から関係性を見だし、音楽の構成要素や音楽構造を把握できるようになること、演奏表情付けにおいても要素を意識した表現を工夫するなど、ピアノレッスンの効果的な指導法として有用な示唆を与えるものと考察する。

## 4. 3 課題と今後の展望

教材としてのフレーズカードは、大きさについて「見やすい大きさだが、楽譜の音符の大きさと差があって戸惑う」という発話から、改善の余地があり、課題となる。また、楽曲全体の構造の把握には、一旦ピアノの前から離れて、縦横にフレーズカードを並べることが可能な場所で、じっくり時間をかけて理解を促す指導が必要である。

今後は、検証レッスンでフレーズカードを自由に並べ替えたり、組み立てたりして演奏するという活動や、自ら演奏表現を考えるという活動で、子どもたちが見せた意欲的な様子をヒントに、主体的に学べるピアノ指導を展開していきたい。フレーズカードを用いたレッス

ンが、主体的に学べるピアノ指導を考える契機となり、ピアノ演奏に積極的で真摯な子どもの姿を見ることがピアノ指導者の充実感にも繋がると考える。

## 注

- (1) SCATとは大谷よりシステム化され公開されている質的データ分析手法のこと。(大谷 2008、2011 他)
- (2) リトミックとは、スイスの作曲家エミル・ジャック・ダルクローズ(1865～1950)によって創案された音楽教育の方法。
- (3) 音楽の構造とは、音楽を形づくっている要素そのものや要素同士のかかわり方、及び音楽全体がどのように成り立っているかなど、音や要素の表れ方や関係性のこと。
- (4) 音楽の要素とは、リズム、メロディ、ハーモニー、の3要素をもとに、音色、速度、強弱、テクスチュア、形式、構成なども挙げられる。
- (5) 音楽の構成原理とは、「反復」「変化」「対照」などの音を音楽へと構成するための原理のこと。
- (6) ダイナミクスとは、音の大きさや強さの度合いのこと。
- (7) アーティキュレーションとは、旋律線を明確に区分する奏法で、小さな単位による区分を意味している。

## 引用・参考文献

- 岩口摂子 (2008)「保育者養成における音楽教育の基礎研究 2ー簡易読譜力調査を通してー」『相愛大学研究論集』pp.191-213.
- 鶴崎庚一 (2019)『アナリーゼの技法 実践のために』株式会社学研プラス.
- 大谷尚 (2007)「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』(教育科学)第 54 卷 2 号,pp.27-44.
- 大谷尚 (2011)「SCAT:Steps for Coding and Theorizationー明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』vol.10 no.3, pp.155-160.
- 大谷尚 (2020)『質的研究の考え方 研究方法から SCAT による分析まで』一般財団法人名古屋大学出版会.
- 嘉村真衣 (2021)「小学校の音楽教科における読譜力育成のための教育実践に関する研究」『国立音楽大学紀要』55, pp.139-149.
- 唐津美和 (2022)「生涯音楽学習の視点から見たピアノ学習の状況ー1998 年と 2021 年の調査結果の比較を通してー」『音楽研究：大学院研究年報』34 卷, pp.277-293.
- 河合玲子・白石朝子・小島友紀 (2017)「子どもの音楽表現を引き出すための指導法の考案：読譜力に着目して」『名古屋女子大学紀要』家政・自然編, 人文・社会編 (63), pp.313-321.
- 木村章子 (2016)「小学校音楽科の読譜指導ー児童の読譜力の実態調査及び授業実践の提案ー」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』第 19 号, pp.15-28.
- 小畑郁男 (2011)「音楽表現と楽譜ー読譜に関する 2 つの視点ー」『音楽表現学』第 9 卷, pp.1-12.
- 田中勝子 (2019)「ピアノレッスンにおける効果的な関連技能獲得に向けた技能獲得状態可視化に関する研究」長岡技術科学大学 博士論文.
- 中島美保 (2022)「ピアノ初心者への読譜力のつけ方の指導法ー初めてピアノを弾く学生指導の経験を基にー」『近畿大学九州短期大学紀要』52 号, pp.129-141.
- 福田由紀子・渡邊洋子 (2019)「保育者養成課程における音楽実技 (ピアノ) 指導法」『白鷗大学教育学部論集』13 (2), pp.49-67.
- 水戸博道 (2009)「読譜のメカニズムー確実な技能の習得に向けて」『音楽教育実践ジャーナル』vol.7 no.1, pp.124-130.
- 森下修次 (2009)「読譜にどう向き合うかー楽譜の必然性と音楽学習」『音楽教育実践ジャーナル』vol.7 no.1, pp.25-32.